

# 「元気いっぱい・笑顔いっぱい」

特別支援教育統括コーディネーター 加賀谷 勝

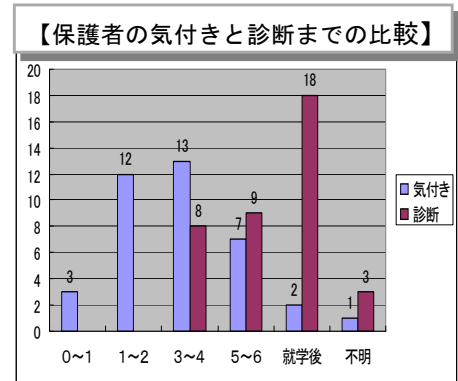
## 「困っているのは、子ども」

園・学校訪問や知能検査等で関わった子どもの保護者の相談・支援活動から、二つの事例を紹介します。

### 〈事例1〉「遠回りこそ、最良の近道」

就学時健診で発達の遅れを指摘されていたHさん。保護者は言葉や知的な遅れに気付いていましたが、通常の学級を選択しました。入学後、学習面の遅れが気になり、知能検査を行った結果、全般的な知的発達に遅れのある数値でした。学校と相談して、保護者に検査の数値や授業での様子を伝え、子ども理解を促しました。同時に交流及び共同学習も行いながら、子どもの発達段階や特性に合わせた教育課程を編成して、子どもの力を最大限引き出すことができる特別支援学級の魅力も伝えました。

後日、「来年度から特別支援学級への入級をお願いします」と、保護者から連絡がありました。上記の図からも分かるように、保護者は子どもの状態に早くに気付いて悩んでいます。しかし、障害や遅れを受け入れることは難しく、家族間に考えのズレも生じるため、医療機関等に相談するまで時間がかかります。園や学校は、そのときの保護者の心情に寄り添いながら、気付きと診断までのズレを埋める役割があります。



### 〈事例2〉「支援のスタートは、周りの気付きと本人の自覚」



支援員のサポートを受けているMさん。中学生となり、周りから求められる要求が高くなり、友達との差が大きくなりました。子どもは不安を感じたとき、困っているサインを行動で表現します。それが問題行動に発展することもあります。人との関わり方にも課題のあるMさんは、少しずつ学級の中に溶け込むことが難しくなりました。そこで、Mさんの指導内容・方法を見直すために、知能検査を実施しました。検査の結果は、全般的な知的な遅れはなかったものの、発達のアンバランスさが見られました。更に検査中、初対面の検査者に親しげに話し掛けてきたり、ぶつぶつ独り言を言いながら課題に取り組んだりする態度に違和感を覚えました。保護者には、メタ認知を高め、他者と折り合いを付ける力を身に付ける必要があると説明しました。Mさん本人には、得意なところを伸ばしながら、苦手さをカバーしようとして伝え、自己理解を促しました。

Mさんは3年前にも同じ検査を受けており、保護者は我が子の気になる行動を心配していました。今回の検査結果を基に、医療機関の受診と個別指導の準備を進める予定です。家庭と学校がMさんの困難さを共通理解できたこと、Mさんが自分の特性を自覚したことで、支援のスタートラインに立つことができました。

二つの事例は、困っているのは子どもであることを前提に、学校が保護者と良好な関係を築きながら外部の関係機関を活用したことで、多様な学びの場の理解につながりました。



**とれたて直送便**



☆「双子のお母さんに直撃インタビュー」～ある町の5歳児健診より～

Q:「性格も似ていますか?」

A:「いいえ、真逆です」

Q:「子育てで気を付けていることを教えてください」

A:「外に出るとみんな二人を比べるので、家ではなるべく比べないようにしています」

